

「平和のための博物館・市民ネットワーク」全国交流会に参加して

ピースあいち研究会 丸山 豊

10月26、27日「平和のための博物館・市民ネットワーク」全国交流会が、埼玉県嵐山町の自然豊かな「国立女性教育会館」で開かれました。交流会には14団体、46人が参加（ピースあいちからは7人）、レポートも11本に及び、現地の中帰連*平和記念館の皆様のお陰で充実した大会になりました。

25分の短い報告時間にも関わらず、それぞれの館の実践、課題が示され、平和博物館の方向を共有できた会となりました。

*中帰連：中国帰還者連絡会



国立女性教育会館

以下順不同で気ままな報告をします

一日目の山辺昌彦さん（わだつみのこえ記念館）の発表で「平和のための博物館と15年戦争関係展示の全国一覧」が示され、ネットワークに参加していない館も平和のために活動している様子がわかりました。関連して、早稲田大学の栗山報告「近年の日本の博物館政策の変容をめぐって」では、自治体首長の権限が教育長の任命、教育内容、博物館展示内容にまで拡大されてきた経過が示され、今回のトリエンナーレ問題の構造的背景を明らかにしました。（「いまこそ市民のための博物館を」『月刊 社会教育 11月号』2019.11）

立命館大学国際平和ミュージアムからは、来年度3年に1度、世界各地で開催される「国際平和博物館会議」（2020.9.16～20 於京都と広島）の説明がありました。SNSなどのネット問題、平和構築のための国際交流、日本国憲法から世界の平和活動の紹介など多彩な分科会や興味深いイベントが計画されています。また1992年に結成された「平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）」の中心メンバーの山根和代さんは、「市民ネットワーク」としての海外と国内の役割、並びに英語版「Muse」と日本語版「ミューズ」の発行の大変さと重要性を指摘されました。



紙芝居「ちっちゃいこえ」の実演

原爆の図丸木美術館からはアーサービナード新作の紙芝居『ちっちゃいこえ』の紹介と実演があり、参加者を和ませました。絵の一枚一枚には《原爆の図》が隠れているとか。翌日フィールドワークで訪れた丸木美術館で、紙芝居に登場するネコ、ハト、少女など捜してみましたが、よくわかりませんでした。現在「原爆の図保存基金」を立ちあげ、作品を管理できる新館建設を目指しています。

ピースあいちからは坂井栄子さんが「子どもの視点」から取り上げた「沖縄展」の報告をしました。今まで知られてこなかった「護郷隊」のゲリラと中野（スパイ養

成) 学校との関連など新情報に基づく展示内容の発表です。本土決戦に備えて、日本各地で少年ゲリラ兵計画が進められ、相当数の中野学校出身者が指導していた事実も判明しています。

企画展「3.1 独立運動 100 年、日韓問題を考える」を取り上げた報告が、山梨平和ミュージアム (YPM) からありました。3.1 独立運動 (1919.3.1) に理解を示した日本人 (石橋湛山、浅川伯教、巧兄弟、柳宗悦等) を地域から焦点をあてつつ、現代の日韓問題「徴用工」も考えるとといったテーマ設定に、YPM の深い歴史認識と自主的な学習と、研究の積み重ねを感じる内容でした。



全体会の様子

リニューアルや施設の増築などに3館が取り組んでいます。まず満蒙開拓平和記念館は修学旅行などの団体を収容できる研修会館をオープンさせ、地域の信頼を得て、全国的に発信し活動しています。ボランティア、ガイドの研修講座も積極的です。

ひめゆり平和祈念資料館は30周年を迎えたリニューアルを多方面から展開する計画です。「さらに戦争に遠くなった世代」「ピンとこない世代」に伝わる「わかる展示」を目指し、かつハワイ展企画、多

言語化などグローバル化も視点に入れています。

第五福竜丸展示館も科学の目からリニューアルしたことで来館者が増えたようです。またアメリカ人監督によるドキュメンタリー映画「西から昇った太陽」の上映運動も進めており、新しい企画はひめゆりと共通する部分がありました。

静岡平和資料センターは「空襲だけの展示」でいいのか、という問いから「空襲に至る戦争の本質と全体像」をどんな形で展示できるか、大学生への呼びかけ、戦後75年事業など前向きな姿勢が示されました。

私たちの戦争と平和資料館 **wam** の池田恵理子さんからは『**wam** からみた「表現の不自由展・その後」と「慰安婦問題」』と、渦中にあるレポートが出されました。池田さんは、〈小さい「平和の少女像」〉を手にのせながら、何回となく脅迫を受けたが、もう気にしないと述べ、アジア各国の支援と研究が進んでいることもあげ、言論テロのような脅しに、屈しない、怯まない、萎縮しないなどの毅然とした態度が大事と報告され、この姿勢は各平和博物館への心強いメッセージにもなりました。

夕食を兼ねて「懇親会」が開かれ、安斎育郎さんも福島から駆けつけて手品を披露、互いに交流を図ることができました。

二日目の記念講演は武蔵大学教授永田浩三さん（元NHKプロデューサー、表現の不自由展実行委員会メンバー）による演題「戦争と平和をどう伝えるか」でした。



にんげんをかえせ(峠三吉)の碑
デザインは四國五郎

現在は大学で、学生たちに戦争と平和を伝える実践をしていますが、現地に立って歴史を感じ、表現する学び方（映像、朗読、劇化）などは、NHK出身ならではの取り組みでした。特にヒロシマにこだわり「原爆を表現した人々」、大田洋子、原民喜、栗原貞子、峠三吉、四國五郎、市民が描いた原爆の絵などスライド映像を通して紹介し、核兵器禁止条約の意義、表現の自由、ものがいえる自由を強調され、最後にあいちトリエンナーレの表現の不自由展中止問題に言及しました。展示室の「平和の少女像」も写し出され、その隣のイスに笑顔で腰掛ける永田さんの姿に、平和への願

いが伝わってくるようでした。表現の自由とは根底に歴史認識の問題が横たわる、ということでしょう。

最大の成果は、「表現の不自由展中止」問題とは平和博物館にとっての死活問題（ピースおおさかの展示内容が行政当局により変更を強いられた前例）との危機感で一致できたことです。これを受けて『「表現の不自由展」に対する行政の介入と市民の脅迫的言辞*に関する声明』が、「全国交流会参加者一同」の名で採択されました。ネット攻撃に過剰に反応し流されがちな現状も懸念しています。

二日目の午後からは「フィールドワーク」。マイクロバスで「丸木美術館」と「中帰連平和記念館」を訪ねました。運転手は中帰連事務局長の芹沢さんで一同びっくりでした。台風19号の大雨で丸木美術館の横を流れる都幾川（位里がヒロシマの太田川に似ていると愛した川）の対岸が氾濫したようで、草木が洪水で倒されていました。この館で見る《原爆の図》はその度に印象が変わります。来春、ピースあいちには、原爆の図第2部《火》がやってきます。



丸木美術館で岡村学芸員より話を聞く

最後の目的地は川越の田園、新興住宅地帯にある目立たない建物、中帰連でした。前日の芹沢さんの端的な報告と28ページに及ぶガイドブック『撫順の戦犯が赦された歴史を忘れない』から「中帰連」を理解していましたが、中に入ってそのクオリティの高さに圧倒されました。蔵書と第一級史料の数々、多くの研究者が訪れるのもわかります。加害の小部屋も貴重な実物資料が並べてあり、参考になりました。

研究会世話人代表として初参加した桐山さんは、他館の研究・運営活動から多くを学び、刺激を受けたようです。私自身も自己満足に陥りがちな日常を振り返り、研究意欲につながったこと、これが今大会から得た最大の収穫でした。



中帰連の前で（フィールドワーク終了時）

【終わりに思ったこと】

平和博物館の重要な役割として「戦争の真実（加害、加担、被害）、平和の意義と概念、現代の課題を自分の問題として考えられる世代を育てる場」があげられます。

次世代へ継承するには、各館が直面する困難（あらゆる圧力、妨害）を萎縮せず乗り越え、かつ日常的な研究・学習を重ね発信すること。これが学校教育、地域との連携をより強めていくこととなります。なぜなら平和博物館は、歴史改竄に屈せず、最新研究に基づく学習の場、教育の場であるからです。（2019.11.10）

注：市民の脅迫的言辞*とは、表現の自由を市民が自ら圧殺する反人権的・暴力的攻撃のこと。声明の中にある「補助金不交付問題」は、学問研究の自由への介入拡大を視野に入れた抗議でもある。（憲法学では表現の自由の本質は、権力批判の自由）

補：10回を迎えた交流会の発展のためには、会の目的、会員、館の加入、会費などを定めた規約等の整備検討が不可欠と感じている。

【永田講演のスライドから】《原爆の図》広島巡回展 原爆ドームの前の記念写真（1951.10）

最前列左から二人目が四國五郎.その後ろが味三吉、隣りに赤松俊、壺井繁治*、丸木位里と座って並ぶ。
（*壺井繁治は詩人であり「二十四の瞳」の作者、壺井栄の夫）



四國五郎は、市民に原爆体験を思いのままに、どんな紙でもいい、文をいれても構わないと呼びかけ、こうして「市民が描いた原爆の絵」が生まれた。
また彼は、辻詩の挿絵やヒロシマだけでなく、シベリア抑留、母子像などを描き民衆の心に訴える平和を絵画で顕した。第五福竜丸の水彩画も残している。詩人、絵本画家でもある。表現の自由が抑圧された時代にも、表現者として黙っていなかった。

参考文献

- 永田浩三『ヒロシマを伝える』p 142 （WAVE 出版 2016）
岡村幸宣『《原爆の図》全国巡回』p 69 （新宿書房 2015）